

中東メディアの発展とその社会的影響

－衛星放送をめぐる議論から－

阿部 るり

はじめに

「9.11」に端を発した「アフガン空爆」「イラク戦争」という世界情勢をめぐる動きのなかで、中東メディアに対する注目が高まっている。情報化が世界規模で進む今日、報道はますますグローバル化し、日本のマス・メディアにおいても中東メディアをニュースソースとする報道が増えている。ただ、日本では、中東から発信される膨大な情報がどのような立場から発せられているのかという根源的な問題に関心は払われることなく、提供される映像を単に垂れ流すもしくは、恣意的に利用しているという印象もぬぐえない。その背景には、中東メディア事情に対する無理解といった事情があることは言うまでもない。

たとえば、カタルの衛星放送局「アル・ジャジーラ」。日々のテレビニュースや新聞記事に登場し、われわれ日本のオーディエンスにとっても中東メディアの代表格だ。アル・ジャジーラは数ある中東メディアのひとつにすぎないが、世論への影響力の大きさや独自の報道手法などにより、欧米の研究者やメディアの注目を一身に集めてきた。特に9.11以降の動きのなかで、「ジャーナリズムを装ったアラブのプロパガンダ」に過ぎないとの批判と「中東のCNN」としてアラブのメディアやジャーナリズムに「革命」を巻き起こしたとの評価が、相半ばする。ただ、アル・ジャジーラがいかに有力なメディアであるからとって、それだけを見ては中東メディアの全体像は俯瞰できない¹。

中東地域で衛星放送などの新メディアが普及したのは1990年代からである。それ以前は、マス・メディアといえば、政府の管轄下におかれた放送メ

¹アラブとはアラブ連盟に加盟する21か国およびパレスチナを指している。中東は、アフガニスタン、イラン以西、トルコやアラビア半島を含む西アジア、スーダンやモーリタニアを含む北アフリカ一帯を示す（『岩波イスラーム辞典』2002年）。ただ本稿ではアラビア語を公用語とする地域を狭義の中東として使用することもある。

ディア、活字メディアが主で、中東のメディア事情は非常に硬直した状況にあった。メディア研究についても各国別の概観にとどまるなど精彩を欠いていた。90年代後半に入ると、中東における衛星放送の普及をきっかけに、中東メディアに関する研究が活発になってきた。ここ数年、日本でも中東メディアに関する記事、論文が発表されているが、残念ながら、一部研究を除き中東という地域性、政治、文化、歴史を十分に考慮しきれていないようだ。

本稿では、はじめに中東における衛星放送の発展を概観した上で、90年代後半以降の中東の衛星放送に関する英文で発表された研究を参照しながら、衛星放送の社会的、政治的影響についてどのような評価がなされてきたのかを明らかにし、中東メディア研究に対する筆者なりの指針を示したい。

1. 中東における衛星放送の特徴－「オフショア」・「二層構造」・「汎アラブ」－

はじめに、中東のマス・メディアや衛星放送の状況を理解する上で重要な第一の特徴として「オフショア」について考えてみたい。オフショア(offshore)とは言うまでもなく「海外で」「外国で」という意味だ。現在、中東には数多くの衛星放送局が存在するが、90年代以降、衛星放送が中東で発達した初期の段階において、放送の拠点は多くの場合、中東には置かなかった。中東の衛星放送局の多くは、当初、ロンドンやローマなどのヨーロッパの都市に本拠地を構え、衛星を利用して中東に向けて放送を行っていた。中東地域外のヨーロッパなど「海外」から放送を行ってきた中東メディアの特徴をオフショアとして捉える(Sakr 2001)ことができる。

例としては、トルコに在住するクルド人向けにクルド語放送を行う「Medya TV」(旧MedTV)やアラブ諸国に向けて放送を行うサウジアラビア資本の民間衛星放送局「MBC (Middle East Broadcasting Centre)」、同じくサウジ資本の「ART (Arab Radio and Television)」などがオフショアな衛星放送局に該当する²。中東の衛星放送が、中東ではなくヨーロッパに拠点を置いて放送を行ってきた理由として、中東諸国において程度の差こそあ

²中東の衛星放送における発展の初期の段階では、「オフショア」の性格が顕著であるが、特に2000年以降にはヨーロッパに本拠地を置いていた中東の衛星放送局が拠点を中東に移転させるという現象も目立ち、必ずしも「オフショア」でないケースもみられる。例としては01年のMBCのロンドンからドバイへの移転やアル・ハヤートのロンドンからベルギーへの移転など。

れ、厳しい言論統制が続いているという現状が指摘できる。自国においては政府からの介入を免れることは難しいが、言論活動の拠点を中東の外に置くことで、ある程度の言論の自由を確保することが可能となる。

中東メディアのオフショア的な性格は、衛星放送に始まったことではない。中東では衛星放送の放送開始以前から、「汎アラブ紙」とよばれるアラブ全域を対象とする新聞が発行されてきた。代表的な汎アラブ紙であるサウジ系の「アル・ハヤート」(Al Hayat)「アッシャルク・アル・アウサット」

(Asharq al-Awsat)、パレスチナ系の「アル・クッズ・アル・アラビイ」(Al Quds al-Arabi)はいずれもロンドンに編集の本拠地を置き、新聞を発行してきた。汎アラブ紙がオフショアに言論活動を展開してきたのも、衛星放送同様に、言論の自由を求めてのことであった³。ロンドンが汎アラブ紙をはじめとする中東メディアのオフショアな拠点であることの歴史的な背景としては、1975年から90年まで続いたレバノン内戦にまで遡る。内戦以前のレバノンでは、他の中東諸国と比較すると、多様な新聞や雑誌が発行され、言論活動は盛んであった。しかし、内戦が勃発することによってレバノンから多くの言論人、知識人がロンドンに亡命。それとともに中東の言論文化の中心がロンドンに移植されたのであった。

中東メディアの二つ目の特徴として、オフショアが進んだ結果として生じた「二層構造」をあげることができる。中東において各国政府の多くは国内メディアについて、活字、放送を問わず言論機関への介入をいつでも行えるよう統制下に置いている。その一方で、汎アラブ紙や衛星放送は本拠地を中東の外に置くことで、各国政府からの直接コントロールからは比較的自由的な言論環境を享受してきた。常に権力に監視されているメディアと、比較的自由的な立場から発言するメディア。二種類のメディアの並存状況こそ、中東のメディア環境の基本構造なのである⁴。報道内容をみると、各国の国内メディアが報道の重点を国内情勢に置くのに対し、汎アラブ紙は各国の情勢にも紙面は割くものの、中東全体を視野に収めた報道を重点的に行っている。

³ ロンドンが中東メディアの拠点とされてきたその他の理由としては、ニュースソースへのアクセス、メディア産業やジャーナリズムに関連した豊富な人材の存在などがあげられる。

⁴ アラブ各国紙に比べ、比較的言論の自由を享受するといわれる汎アラブ紙に対しても、新聞の経営者や運営を財政的に支援する人物、国、機関などに対する批判は差し控えられるという傾向や自己検閲が行われているという指摘もあり、必ずしも自由とはいえない状況も存在する。

2. 衛星放送の発展

90年12月にエジプトによる衛星放送開始以降、中東の衛星放送は、次の四つのターニングポイントを経て発展してきた。(1)91年の湾岸戦争 (2)アル・ジャジーラや「FutureTV」(レバノン) などサウジアラビア (以下、サウジ)、エジプト以外の衛星放送が開始された96年 (3)03年のイラク戦争 (4)イラク戦争後のイラク復興過程——。以下、これら四つの転機を経て大きく変化を遂げる中東の衛星放送をめぐる状況について概観する。

(1) ポスト湾岸戦争

中東諸国では1950年代から70年代にかけてテレビ放送が開始された。放送開始当初から、レバノンを除くエジプト、シリア、イラクなど中東諸国において放送メディアは政府により独占され、国家のイデオロギーを喧伝する手段とされてきた (Rugh 2004) (Amin 2002)。しかし、こうした硬直したメディア状況にも90年以降、大きな転機が訪れる。変化のきっかけとなったのは、91年の湾岸戦争である。湾岸戦争中、中東の国内メディアはこれまで同様、各国政府に都合がよい報道を行っていたが、米CNNはバグダッドから中継放送を行うなど衛星放送としての威力を発揮し、中東メディアでは知ることのできない「現実」を中東の民衆に見せつけた⁵。湾岸戦争やそれを中継したCNNの存在は、90年代以降の中東における衛星放送が急速に発達していく上での起爆剤になったといっても過言ではないだろう。

中東初の衛星放送は90年12月、エジプトの国营放送機構 (ERTU) によって開始された。湾岸戦争当時、エジプトは湾岸諸国に多数の兵を派遣しており、衛星放送「ESC」(Egyptian Satellite Channel)は、湾岸地域に駐留するエジプト兵向けに始められたものであった。当時、湾岸諸国に向けてはイラクからのプロパガンダ放送が行われており、ESC を開設したエジプトの目的はイラクに対抗する上で、独自の放送を行うことにあった (Sreberny 2001:108)。さらに湾岸戦争後、エジプトのESCを皮切りに新たな衛星放送局が相次いで設立される。91年にはサウジ資本のMBCがロンドンから放送を開始、94年には同じくサウジ資本のOrbitがローマを拠点に、ARTはカイロに制作拠点を設け中東に向けて放送開始している。エジプトのESCが国营

⁵サウジの国营メディアはイラクのクウェートへの侵攻を三日間伝えなかったという経緯もある。

であることから、サウジのMBCが中東では初めての民間衛星放送局ということになる。湾岸戦争後から94年の間には、UAEの「DubaiETV」、ヨルダンの「JSC」も放送を開始しているが、概していえるのは中東の衛星放送におけるエジプトとサウジのプレゼンスの大きさである。

中東における衛星放送

放送開始年	放送局名	主要関係国※	本拠地	所有形態
1990年	ESC	エジプト	カイロ	国営
1991年	MBC	サウジアラビア	ドバイ	民間
1992年	DubaiETV	UAE	UAE	国営
1993年	JSC	ヨルダン	アンマン	国営
1994年	ART	サウジアラビア	カイロ	民間
	Orbit	サウジアラビア	ローマ・マナマ	民間
	RTM	モロッコ	モロッコ	民間
1995年	STV	シリア	ダマスカス	国営
1996年	LBC	レバノン	ベイルート	民間
	FutureTV	レバノン	ベイルート	民間
	Al-Jazeera	カタール	ドーハ	独立
1997年	ANN	シリア	ロンドン	民間
1998年	Nile Channel	エジプト	カイロ	国営
2000年	Al-Manar	レバノン	ベイルート	民間
	Al-Mustaqilla	チュニジア	ロンドン	民間
	NBN	レバノン	ベイルート	民間
	Abu Dhabi TV	UAE	アブダビ	国営
2001年	DreamTV	エジプト	カイロ	民間
	ZaynTV	レバノン	ドバイ	民間
2002年	Al-Mihwar(現al-Haya)	エジプト	カイロ	民間
	Al-Khalifa	アルジェリア	パリ	民間
2003年	Al-Arabiya	サウジアラビア	ドバイ	民間

Sakr (2001) およびRugh (2004) を参照のうえ作成。

※所有国および主な所有者の国籍をあらわす

(2) 1996年以降

96年以降、中東の衛星放送におけるエジプト、サウジ両国の優勢に転機が訪れる96年にはレバノン資本の「LBC(Lebanese Broadcasting Corporation)」およびFutureTV、カタールのアル・ジャジーラが相次いで放送を開始するこ

とで、エジプトとサウジの優位性が揺らぎ始めた。レバノンでは96年に新たなメディア法が施行され国家による放送メディアの独占に終止符が打たれたことにより、アラブ諸国で初めて地上波による民放の運営が可能となった。また、カタールでは95年に現ハマド首長が父である先代から首長の座を奪い取り、カタールの民主化を推進する過程において、アル・ジャジラーラを設立した。

ここで湾岸戦争から96年までの間に登場した各局について具体的にみていきたい。いずれの局も、特定の国や資本を背景に持つものの、共通しているのは放送のオーディエンスをアラブ全域に設定している点である。各局の間には、放送内容などの点において違いがみられ、中東の衛星放送局は棲み分けがなされてきた。91年から94年の間に相次いで設立されたサウジ系の衛星放送局3局も、サウジ資本による運営という点では共通するが、放送内容に対する重点の置き方は、それぞれ異なる。MBCはファハド・サウジ国王の義理の兄弟にあたるシェイク・ワリド・アル・イブラヒム (Shaikh Walid al-Ibrahim) およびバラカ (Al-Baraka) 財閥を率いるシェイク・サレ・カメル (Shaikh Saleh Kamel) によって設立された放送局である。「アラブの目を通した世界観 (Ayish 1997: 476)」を提供することを謳い、ニュース、情報、娯楽を織り交ぜた放送を行ってきた。中東をはじめとする各国に特派員を派遣するなど当初、ニュース部門に力を入れていたが、予算の削減や96年に設立されたレバノンのLBCやFutureTVとの競争を勝ち抜くためにニュースから娯楽へと放送の重点を移した⁶。

ARTは、MBCの共同設立者であったサレ・カメルが所有していたMBC株を売却⁷、新たにサウジ皇太子のアル・ワーリド・ビン・タル (al-Walid bin Talal) とともに設立した衛星放送局である。サウジ政府、王室との摩擦を避けるため、ニュース報道を敢えて避け、家族一般向けの番組に特化している。94年の放送開始当初は一般、スポーツ、子供向けなど四つのチャンネルで無料放送を行ってきたが、96年有料放送化に踏み切った (Sakr 2001)。中東地域に流れこむ「欧米的な番組と戦う」 (Rugh 2004: 213) ことを局の

⁶1996年11月11日から18日のMBCの番組構成を内容分析したAyishによれば、番組のカテゴリー別構成比は以下の通りである。情報：20.58%、宗教：8.82%、娯楽：29.41%、スポーツ：8.82%、ニュース：20.58%、子供：5.88%、その他：5.88%。(Ayish 1997)

⁷MBCを財政面で非公式に支援することを通じ、王室に友好的な汎アラブ・チャンネルを維持していきたいとのサウジ王室の意図があった。MBC=王室のテレビという一般的なイメージあり。そうした意図を感じたKamelは37.5%保有していたMBC株を売却、新たな放送局を設立した。Sakr (2001:78)、Rugh (2004:212)。

主要な方針とし、アラビア語以外の放送を最低限にとどめた。不足ぎみなソフトについては古いエジプト映画を充当した (Sakr 2001:78)。当初、放送拠点はローマに置かれたが、後にカイロに移転した。

ARTと同じ94年に設立されたOrbitはサウジ資本としては三番目に設立された衛星放送局である。Orbitはサウジ皇太子であるハリド・ビン・アブドゥッラー (Khalid bin Abdullah) 率いるマワリド (al-Mawarid) 財閥によって設立された。ディズニーチャンネルを擁するなど、サウジの衛星放送局のなかでは最も欧米的な方向性を打ち出す局である (Sakr 2001:48)。放送の視聴は有料とし、中東の富裕層や欧米のアラブ系移民を主な視聴ターゲットとしてきた。Orbitは設立当初からBBC(アラビア語局)と10年契約を締結し、BBCの制作した番組を検閲しないという条件のもと報道やドキュメンタリー番組をOrbitの所有するBBCアラビア語チャンネルで放送してきた。BBCラジオのアラビア語国際放送が歴史的にみても、中東地域で人気を集めてきたという状況が連携の背後にある。Orbitは中東の地域文化やオーディエンスの志向に合致し、かつ社会的責任のある番組作りを目指すうえで、BBCを有力なパートナーとみなしたのだった (Sakr 2001: 48)。しかし、OrbitとBBCの協力関係は長続きしなかった。BBCがOrbitのチャンネルにおいてイギリスなどでサウジ反体制派活動を行うモハメド・アル・マサリ (Mohamed al-Masari) について報じたことがOrbitとBBCの摩擦の発端となり、さらに96年4月にサウジの人権問題についてBBCがOrbitの番組で取り上げたことで、両者の関係は決定的に悪化した。Orbitは即刻、BBCとの契約を解除した。その後、Orbitは香港のStarTVと提携関係を結びソフトの提供を受け (Sakr 2001: 97)、サウジの国内政治からは一線を画し、娯楽、バラエティチャンネルとしての性格を持つようになった (Ghareeb 2000)。

アル・ジャジーラはOrbitとBBCの契約が破綻し、宙に浮いた人員を雇用し、ニュース専門局として96年11月放送を開始した。カタルでは首長交代以降、ハマド新首長(Hamad bin Khalifa al-Thani) によって情報省の撤廃、地方選挙の実施、女性への選挙権付与など国内改革が進められており、アル・ジャジーラ設立も民主化改革の一環として捉えることもできる。アル・ジャジーラは、5年間の運営にあたって約150億円の補助金をカタル政府から受け、国営ではなく独立した放送局としてスタートをきった。

設立当初は使用していた衛星からの電波到達範囲が狭く、広範な視聴者を

集めることができなかつたが、97年に使用周波数帯を変更し、放送のカバー範囲を広げた。アル・ジャジーラは、汎アラブ的な観点からニュース報道を積極的に行ってきたMBCやレバノンのLBCが放送の重点をニュースから娯楽に移すことで⁸、ニュース専門チャンネルとしての地位が向上。これまでのアラブのテレビにはなかつた報道手法や番組を有することでアラブ諸国の注目を集めた⁹。01年の9.11やアフガン空爆以降は、スクープ映像の提供などを通して認知度は世界中に広がった。看板番組『反対方向 (al-Ittijah al-Mu‘akis)』など政治、宗教、文化的にも多様なイデオロギーをもつ識者が番組に登場。「検閲のない」ニュース報道はアラブの視聴者の人気を集める一方で、アル・ジャジーラに対するアラブ諸国の政府からの抗議は後を絶たない。

レバノンは歴史的にみれば中東におけるメディアの発展のなかでエジプトと並び中心的な役割を果たしてきた国である。しかしながら75年に勃発したレバノン内戦により中東の言論活動における中心性は失われ、内戦後長い期間、分散した状態が続いた。現在のレバノンの衛星放送のあり方には、レバノンのメディア全般がかつてそうであったようにレバノン社会の多様な宗教構成が反映されている。LBCはマロン派キリスト教徒、05年2月に暗殺されたハリリ前首相が部分的に所有していたFutureTVはイスラーム教スンニー派、「アル・マナール」(Al-Manar)はレバノンを拠点として活動するイスラーム教シーア派組織ヒズボラといった具合だ (Sakr 2001: 50-51)。メディアの所有については宗派、宗教による違いがあるものの、LBC、FutureTVに関していえばその違いが必ずしも番組の内容や構成に反映されているわけではなく、アラブ全般を対象としたドラマ、スポーツ、コメディなどの娯楽とニュースや討論番組を織り交ぜた総合チャンネルとしての性格が強い。また、LBCは部分的にサウジのARTのオーナー、サレ・カメルによって所有され、番組や衛星中継の点でARTの協力を得ながら運営されており、カメルによるLBCに対する影響力の行使も指摘されている (Sakr 2001: 53)。

⁸98年1月レバノン政府は第531法によってLBCIとFutureTVに対してニュースを放送することを禁じた。禁止は9ヶ月間に及んだ。(Sakr 2001: 54)。MBCについてもアル・ジャジーラとの競争を意識し、差別化を図るため、ニュースや「深刻な問題」を避け、政治色のない娯楽的な番組構成がみられる (Salamandra 2003)

⁹公称ではアル・ジャジーラの視聴者は世界で3500万人いるとされている。中東地域外では有料で視聴が可能 (Sakr 2001:154)。

(3) イラク戦争 (2001年)

湾岸戦争時の戦争報道がCNNによる独壇場であったのに対し、9.11に至る10年で中東の衛星放送事情は大きな変化を遂げていた。イラク戦争における戦争報道においても、中東のメディアは存在感を世界に向けて大きくアピールすることにも成功した。しかし、同時にアル・ジャジーラのこれまでの成功を念頭に「アル・アラビア」(Al-Arabiya)などのニュース専門チャンネルが設立されるなど、中東地域では乱立する衛星放送間の競争も目立つようになってきた¹⁰。

アル・アラビアはイラク戦争の直前、03年2月にUAEの都市ドバイを本拠地に設立されたニュース報道に特化した放送局である。アル・アラビアはMBCを率いるシェイク・ワーリド・イブラヒムが、サウジだけでなくクウェート、ヨルダン、バハレン、レバノンなどアラブ各国から広く賛同者を得て設立した。MBCとの結びつき、資本提供者やその出身国からは、中東地域でこれまで優勢を極めてきたカタルのアル・ジャジーラに対して、サウジ系やその他の資本が積極的に対抗していく構図を見て取ることができる。

イラク戦争中、戦争報道において世界的に注目された中東の衛星放送としては、アル・ジャジーラ、アル・アラビアの他に「アブダビTV」(Abu Dhabi TV)の名前を挙げるができる。アブダビTVはアブダビ政府の補助金によって運営されており、もともとはニュースと娯楽番組によって構成される総合チャンネルであった。その後、湾岸諸国向けの「エミレーツ・チャンネル」(Emirates Channel)、有料の「ドバイ・スポーツ・チャンネル」(Dubai Sports Channel)、ニュースに特化した「アブダビ・チャンネル」(Abu Dhabi Channel)の三チャンネルを持つに至った。特に、アブダビ・チャンネルを通して、イラク戦争を機に戦争報道に力を入れ、ニュース・チャンネルとしての側面に注目が集まった (Khalil & Ghaida 2004)。

これら三局によるイラク戦争報道を比較したハリルとガイダによれば、アル・ジャジーラはアフガンでの報道経験を生かし、イラク戦争によってさらにアラブのみならず世界の聴衆を獲得することに成功をおさめたとしている。一方、アル・アラビアはMBCの協力もあり技術的な面での成功はあったものの、報道ではニュース価値のある映像がなかなか撮れないことや、

¹⁰ 03年までに中東全域に向けてアラビア語にて放送を行う衛星放送局の数は14に達している (Rugh 2004: 218)。

新興の放送局であることから政治的障害を越えられず十分な取材体制が整備されていないなどの問題点があったことが指摘されている。アブダビTVはベテラン・リポーターやアンカーをバグダッドに派遣、戦争報道に力を入れ、特に、戦争の終盤において独占映像をものにすることでニュース・チャンネルとしての認知度を高めた (Khalil & Ghaida 2004)。

中東においてニュース専門の衛星放送局が複数誕生することによって、各局が独自取材網を築き、ニュース報道において欧米の通信社に依存するというこれまでの体制が改められた。これにより、中東のオーディエンスに対しては「アラブの視点」に立ったニュースを提供し、さらに世界に対しても欧米メディアが伝えないオルタナティブな見方や現実を提示したという点では、これらメディアのイラク戦争報道は評価されるべきであろう。しかしながら、アブダビTV幹部のモハメド・ドウラチャド (Mohamed Dourrachad) が述べるように、中東の衛星放送局の間での競争が増す一方で、ニュースをどの局よりも早く入手し、独占映像をものにしたいという傾向が、プロバガンダや誤報を生んでいるという状況も見逃してはならない。ドウラチャドが指摘するように、ニュースの理想としては、「正確、客観的であると同時に、スクープである」こと、あるいはそれらの間のバランスをとることが求められる。これらは中東のニュース・チャンネルにとっての課題でもある (Dourrachad 2002)。

(4) イラク復興

イラク戦争を機に中東の衛星放送はますます活況を呈するようになった。戦争後は、なかでもイラクを中心として中東のメディア状況に変化が見られる。戦争がはじまる03年3月までイラクは厳しい言論統制下にあり、メディアはイラクの支配政党であったバース党やサダム・フセインの親族らによって独占的に掌握されてきた。しかし、03年4月フセイン政権が崩壊するとともに、既存のメディア体制が崩れ、イラクには暫定的なメディアの「空白地帯」が生まれた。その空白を埋めるべく、イラク国内の各種組織はもとより、アメリカや周辺各国が、新生イラクに対して影響力を行使すべく、メディアを通じ火花を散らしている。

04年2月、アメリカ政府はワシントンD.C.から「自由」を意味するアラビア語による衛星放送「アル・フッラ」(Al Hurra) の放送を開始した。米国はアラブ・メディアでの経験のあるアラブ人ジャーナリスト約200人を起用

し、中東における米国のイメージアップや「民主化」を促すために年間6億ドルもの予算を割いている。また、イランはイラクのシーア派住民に向けて衛星放送「アールム」を放送するなど、イラク国民に向けたイデオロギー的影響を狙った海外からの放送も活発になっている。しかしながら、中東ではこうしたアメリカによるメディア戦略には懐疑的な見方が圧倒的である。衛星受信機の所有が自由化されたイラクではアル・ジャジーラやアル・アラビアなどの放送が人気を博しており、イラクのメディアの空白を狙い参入する民間メディアの存立は危ぶまれるほどだ。

以上、90年代以降の中東世界における衛星放送の発展をみてきたが、その発展の過程からは、衛星放送が湾岸戦争やイラク戦争などの戦争と密接に結びつき発達してきたという事実を指摘することができる。確かに、中東における戦争やパレスチナにおける紛争などが中東の衛星放送を発展させる上で起爆剤としての役割を果たしたには違いない。しかし、これらのメディアは、90年代以降の中東における民主化や規制緩和、新たなコミュニケーション技術の導入といった複数のファクターとの相乗効果の上に成立したものであると考えるべきであろう (Ayish 1997: 475)。中東においては民間による放送メディアの歴史は浅いが、10年という比較的短い時間でこれほどまでに発達できた背景には、既存のアラブのメディアや欧米のメディアによるニュースの伝え方に対するアラブの民衆の不満があり (Ghareeb 2000: 400)、衛星放送はそうした不満に答えるかたちで存在価値を確立したといえる。

3. 中東における衛星放送の影響

急速に発達した衛星放送は中東社会にどのような影響や変化をもたらしているのだろうか。90年代後半以降、中東地域においてメディアが発達するとともに、中東メディアに関する研究も徐々に活況を呈してきた。この章ではまず90年代以前の中東メディアに関する状況を手短かにみてみよう。

かつて1950年代から60年代にかけては「近代化とコミュニケーション」モデルが注目を浴び、中東社会の近代化においてマス・メディアの果たしうる役割について楽観的なビジョンが提示されていた¹¹。しかしながら、中東の

¹¹ Daniel Lerner (1958) *The Passing of Traditional Society: Modernizing the Middle East*. New York: Free Press.

多くの国ではメディアは政府の配下におかれ、国家開発や国民を動員する手段として長らく位置づけられてきた。メディアに関する研究は存在したものの、その大半は各国のマス・メディア状況を説明するにとどまり、言論の自由が保障されない社会においては批判的なメディア研究が存在する余地などなかった。「近代化とコミュニケーション」から90年代に至るまでわずかな研究は存在するものの、事実上のメディア研究不在の時代が続いた¹²。その間、発表された例外的な研究としては、ルフの研究を挙げることができる (Rugh 1989)。

ルフはアラブ世界のメディアをモビリゼーション型、ローヤリスト型、その他の三つの類型に分類し、政治体制との相関性においてアラブのメディア状況を捉えた。こうした分類においてアラブ・メディアを分析することの有効性は現在薄くなっているが、ルフの研究は70年代から80年代にかけてのアラブ・メディアの一般的な特徴を理解する上では有効であろう¹³。

その他の研究としては、アラブ世界の放送を概観したボイドによる研究をあげることができるが、概観に終始し放送に関する十分な分析がなされていない¹⁴。ファンディが指摘するように放送メディアを詳細に分析した研究やメディアの中東社会に対する影響などを扱った研究は非常に少なかった (Fandy 2000:383)。90年代後半以降、中東におけるメディアの発達にともなう、メディア研究も活性化する。全般的には制度的な側面からの研究が多いが、テーマとしては中東社会における衛星放送やインターネットなどの普及と影響について論じたものが目立つ¹⁵。

¹² 第三世界諸国全般において特に1960年代から70年代にかけてマス・メディアを民主化という問題関心から扱った研究がほとんど存在しなかったとの指摘もあり、この状況が中東特有ではないことがわかる (Daniel C. Hallin (1998) "Broadcasting in the Third World." T. Liebes and J. Curran (eds.) *Media, Ritual and Identity*. London: Routledge)。

¹³ Rughが言及する特徴は主に新聞に関する分析から得られたものであり、以下の通りである。①メディアを運営する上での経済基盤の弱さ、②政治化され、政府による政策の正当化と喧伝に用いられる政府の広報紙的や区割り、③国境による分断、④メディアやジャーナリズムに対する低い信頼度、⑤オーラルコミュニケーションの重要性。

¹⁴ Douglas, A. Boyd (1999) *Broadcasting in the Arab World*. Ames, IA: Iowa State University.

¹⁵ *Political Communication* 19号 (2002年) では、中東における政治的コミュニケーション特集、*Middle East Journal* 54号3巻 (2000年) では中東におけるニュー・メディア特集が組まれている。その他、「トランスナショナル研究」(注12参照) などには中東における衛星放送に関する研究が蓄積されている。

(1) 中東メディアの社会的影響についての評価・分析—三つの視点—

中東における衛星放送など、新たなメディアの普及が中東社会に対して及ぼす影響については、90年代後半以降、世界各地で開かれてきたシンポジウム、パネルディスカッションでもその評価をめぐり、二極化する傾向が見られる (Wise 2004)。一方は中東における衛星放送は中東に民主化をもたらすという意見であり、もう一方は中東の衛星放送は中東の民衆の反米、反イスラエルの感情を煽る偏向したメディアであるとの見方である。筆者は、衛星放送が中東社会に対して一定のインパクトをもたらしたことを評価しつつも、冷戦崩壊時に東欧において衛星放送が果たしたように、衛星放送が中東に民主化をもたらし、社会を変革するといったメディア中心的な楽観論に対しては、一定の距離をおきたい。以下、本章では衛星放送の社会的影響の可能性と限界について考察する。衛星放送と中東の「民主化」について論じた論文や記事は近年増加しており、これらを踏まえながら両者の関係を整理したい¹⁶。

この問題については、全般的にみて三つの立場が存在する。一つ目の立場は、主に中東の衛星放送を「アラブやイスラーム主義者のプロパガンダ」であると位置づける「プロパガンダ」派、二つ目の立場は、民主化を促すとしてその影響力をポジティブに捉える「楽観」派、三つ目の立場としては衛星放送については一定の評価を行いつつも、その民主化機能については懐疑的な見解を示す「懐疑」派である。

(2) 中東メディアは反米的か

はじめに「プロパガンダ」派の見解からみていこう。この立場をとる代表的な論客としては、米国在住の中東研究者F.アジャミの名を挙げることができる。以下、アジャミが2001年11月、「ニューヨーク・タイムズ」にて発表した「ムスリム世界が観ているもの(What the Muslim World is Watching)」という中東の衛星放送局に関する論考をもとに、プロパガンダ派の見解の具体的内容を見ていく。

¹⁶ 本稿ではカイロ・アメリカン大学とオクスフォード大学によって主催される「トランスナショナル放送研究 (Transnational Broadcasting Journal)」(ウェブ上で公開: <http://www.tbsjournal.com>) において活発に展開されてきた中東における衛星放送に関する諸研究や中東地域研究、メディア・ジャーナリズム研究の分野においてこれまで英文で発表されてきた研究などを主に参照する。

アジャミは中東の衛星放送のなかでも、特にアル・ジャジーラを取り上げ、その報道がいかに「偏向」しているかを次のように説く。「他のアラブ・メディアに比べれば、アル・ジャジーラはより独立的な放送局かもしれない。しかし、アル・ジャジーラは他局と比べより煽動的だ。汎アラブ的な世界観の暗部である攻撃的な反米主義、反シオニズムによって、アル・ジャジーラは突き動かされている。欧米ではアル・ジャジーラは自律したアラブの報道機関であると賞賛されることもあるが、フェアで報道機関としての責任を果たす局とみなすのは間違いである。日々、アル・ジャジーラは意図的にムスリムの怒りをたき付けている」(Ajami 2001)。アジャミは、2000年にはじまった第2次インテファダの報道を具体例として考察。①自爆テロ犯を「殉教者」と呼ぶなど報道が中立的でない②パレスチナにおいてイスラエル兵によって射殺された12歳の少年の死を感情的に伝える③一連のパレスチナでの出来事を米国のテレビがまるでクリントン大統領とモニカ・ルウィンスキーのスキャンダルを報じるように繰り返しセンセーショナルに報道する——。これらを根拠にアジャミは、アル・ジャジーラが煽動的なメディアであると断じている。

また、米国の保守紙「ワシントン・タイムズ」が掲載した「憎悪を煽るTV対世界の平和」という解説記事は、アル・ジャジーラやレバノンの「アル・マナール」を「聖戦を呼びかけるテレビ・チャンネル」「反西洋主義的なイスラームのプロパガンダの旗艦」と形容。これらのメディアが憎悪を煽っていると非難の色を隠さない¹⁷。

ダルウィッシュは過去20年の間に中東において急速に台頭してきた反米主義の背景に、メディアにおける反米主義的な報道の影響もあつたとみている。反米主義は国営メディアのみならず、民間メディアにも見受けられるとし、なかでも新興のアル・ジャジーラやアル・アラビアなどの衛星放送は反米主義をシステムティックに利用することで視聴者を獲得してきたと述べている (Darwish 2003)。

こうした中東の衛星放送を敵視するようなプロパガンダ派の立場は、一部のアメリカのマス・メディアなどで展開されてきた。では中東メディアは以上にあげた論考が指摘するように偏向した報道を実際に行っているのである

¹⁷ Ariel Cohen "Hate TV vs. Peace on Earth" *Washington Times* 2004.12.22

うか。内容分析を行ったリナウィ及びアイーシュの研究をもとに考察している。

(3) アラブのメディアは反イスラエルのか—内容分析から—

湾岸戦争は世界ではじめてのリアル・タイムで放送された戦争であったが、第2次インテッファダは、中東においてはじめてのリアル・タイムで放送された紛争となった。87年に勃発した第一次インテッファダは中東にはまだ衛星放送がなかったことから戦況は各国の国営メディアによって伝えられた。当時の国営メディアにとってもパレスチナ問題は重要なニュースではあったものの、リナウィが指摘するように「各国の首脳がパレスチナ問題にいかに取り組んでいるのかを示す以上に、パレスチナ問題それ自体をとりあげてはならない」(Rinawi 2003:59)という暗黙の了解があった。血なまぐさい映像とともに情報発信する近年の衛星放送の報道姿勢とは対照的である。リナウィはアル・ジャジーラによるパレスチナ問題に関する報道を分析し、たとえイスラエル側のニュースソースが引用されてもアル・ジャジーラにはパレスチナ側の視点に立つという明らかな編集ポジションがあり、ジャーナリズムの客観性よりもオーディエンスへのアピールを優先していると指摘する(Rinawi 2003: 57)。

複数の衛星放送局のニュース分析を行ったUAEのシャルジャ大学助教授、アイーシュも同様の見解を示している。2000年9月に発生した第二次インテッファダの期間中に、アブダビTV、アル・ジャジーラ、「シリア衛星チャンネル」の三局の報道を内容分析したところ、パレスチナ側に否定的な報道はひとつもなかった(Ayish 2002)。この論文に先立ち、アイーシュは衛星放送が視聴者の注意をひこうとするあまり、センセーションナリズムに走り、「汎アラブ的な問題となると、バランスのとれた報道という意味での客観性は、事実上存在しないも同然である(Ayish 2001:13)」とも述べている¹⁸。

(4) 「中東メディアの報道は客観的でない」への反論

以上にあげたデータや論考では、中東メディアの偏向性が指摘されていた。しかし、他方でアル・ジャジーラが存在やその報道を肯定的に捉える見方も

¹⁸ Hafez (2004) においても同様の指摘がみられる。

存在する。エル・ナワウィとイスカンドルは著書『アル・ジャジーラ』のなかで、欧米による中東メディアに対する偏向、反米、反イスラエルとの批判に対して、中東メディアにおける「コンテクストのある客観性 (contextual objectivity)」の存在を主張する (El-Nawawy & Iskandar 2002: 27)。コンテクストあるの客観性とは、「メディアはターゲットとするオーディエンスの価値観や感情をある程度反映させて放送を行うべき (El-Nawawy & Iskandar 2002: 27)」との考えに立つ。報道における客観性を軽視するわけではないが、報道にはローカルなコンテクストも考慮する必要があるとする立場である。9.11以降のアメリカのメディアが国民の感情を考慮したように、中東のメディアも民衆の感情を考慮しているに過ぎない。ラリー・キングが「もう一方の意見を聴くべき」というように、アル・ジャジーラが行っていることはまさにもう一方の意見をメディアにおいて取り上げているに過ぎないと、エル・ナワウィらはアル・ジャジーラによるアラブというローカルなコンテクストを考慮した報道の意義および必要性を強調している。

また、中東メディア研究を専門とするサクルは、報道において「バランスに欠ける」などの中東メディアに対する批判は、欧米メディアによる長年にわたるイスラエル・パレスチナ問題に関する報道の「偏向」を見過ごしているとし、「偏向」という点での欧米からの批判は妥当ではないとする。さらにアメリカ政府自身も湾岸戦争以降、戦争における「情報戦」を戦略的に位置づけていることから、アル・ジャジーラの報道に対する非難や攻撃はフェアではないと指摘している (Sakr 2004: 159)。

(5) 中東メディアの影響—「肯定派」—

以下、衛星放送の社会的影響を肯定的に捉える論考についてみていこう。これらの論考の多くは衛星放送やインターネットなどの新たなメディアが中東社会に民主化や市民社会をもたらすとの楽観的な見方を呈しているという点で特徴的である。例えば、カタールTVのコンサルタントを務めるアル・ハリルはアル・ジャジーラがこれまでタブーとされてきた問題に「革命的」に取り組むことによってカタール社会に影響を及ぼし、さらにこうした影響が市民社会の形成につながる可能性をもっていると述べている (al-Halil 2000)。そのひとつの例として98年のカタール地方選挙における女性への選挙権付与を挙げている。また、アミンは近年の中東における衛星放送の普及に触れて、「コ

コミュニケーション革命は中東にも全面的に到達し、アラブ社会の経済、社会、政治的な分野において劇的な変化を引き起こしている(Amin 2000: 3)」と評価している。中東の衛星放送に対する楽観主義的な見方の多くは、詳細な調査に基づいた主張ではなく、むしろ希望的観測である面が強い。またこうした論考の多くはメディア中心的な見方に立ち、メディアの啓蒙的な側面に注目する傾向がある。

(6) アラブの「公共圏」から「情緒圏」へ

衛星放送が「民主化」を促すとは断定しないが、衛星放送などの新しいメディアが中東社会において公共圏を作り出しているとの指摘もみられる(Anderson 1999) (Eickelman and Anderson 1999) (Lynch 2003)。中東メディアを批判的に見る者にとって、「アラブの公共圏」は、反米や反イスラエル主義が渦巻く場ということになるだろうが、アンダーソンらは公共圏をある種の建設的な場として捉えている。メディアに媒介された公共圏においては「アラブ主義(Arabism)の新たな概念」がつくりだされ、メディアにおける知識人を介した地域間の対話を可能にし、アラブの連帯、世論などを生み出す場として機能すると考えられている(Alterman 1999)。

湾岸戦争時、米軍やイラク軍によって戦争報道がコントロールされ、報道がCNNの独壇場であったことを考えれば、衛星放送の存在はアラブの世論を集約し、対外的にもアラブの世論の存在を示すことによって、欧米中心的な国際コミュニケーション状況に一石を投じたと評価できるであろう。しかし、中東地域内には、「アラブ」をひとくくりに捉えることはできない状況も存在する。かつて1950年代から60年代にかけてアラブ・ナショナリズムが全盛であった時代、エジプト政府による対外ラジオ放送「アラブの声(Sawt al-Arab)」がアラブ世界において広範な視聴者を集め、人気を博していた。エジプトは「アラブの声」をアラブ・ナショナリズムの牽引車として位置づけ、アラブの民衆はこのラジオ放送を通してアラブ世界の一員としての意識やアラブの連帯を想像したといわれている¹⁹。最終的には、67年の第三次中東戦争においてアラブ側がイスラエルに敗北したにも拘らず、敗北の事実を

¹⁹ アラブ・ナショナリズムは「アラブの統一を求める思想と運動」であり、「オスマン帝国の崩壊および西欧植民地主義列強の進出と結びついて形成された」運動である。特に1950年代後半にエジプトのナセル大統領が主導権を握る運動として台頭した(『岩波イスラーム辞典』2002年より)。

伝えないばかりか、アラブ側の勝利を虚報として伝えたことや、敗北によるアラブ・ナショナリズムの後退で「アラブの声」への支持は急速に失われていった。

衛星放送が普及した90年代以降においては、衛星放送がかつてのアラブの声の役割、つまり、アラブの連帯やアラブの民衆を動員する機能を果たしているとの指摘もなされている (Saeed 2003)。しかし、衛星放送が乱立する今日、発信される主義、主張は多義にわたり、政治的にみても一枚岩としてのアラブはもはや存在しがたい状況にある。中東の衛星放送の発展においても見てきたように、衛星放送が各国の政府、権力者、企業家などの手中にあり、彼らはそれぞれの立場から、メディアを通じて中東地域内や世界に対して影響力を行使することを狙っている。これらの主体はメディアを「権力への投資手段」(Sakr 2001:46) (Rugh 2004: 213) とし、戦略的に位置づけている。衛星放送の乱立はメディアを介したヘゲモニー争いの様相を呈しているのだ。もちろん、中東諸国ではメディア所有の点においても所有が一部の資本に集中する傾向にあり²⁰、民間、独立放送においても各国の権力から自由であるとは言い難い状況にある。

90年代以降の中東におけるメディア状況を再び概観すると、90年代前半まではエジプトとサウジアラビアの覇権争いが目立つ。エジプトは歴史的にみてもアラブ世界の映画産業における中心的な役割を果たし、「アラブの声」のケースにもみられるように、メディアに関してアラブ世界をリードするような立場を享受してきた(Sakr 2001b)。90年代後半以降になるとエジプトの影響力が落ち、MBC、ART、Orbitなどの主要な衛星チャンネルをもつサウジが勢いを強めていく。そうした状況のなかで96年、サウジによるメディア・ヘゲモニー状況に一石を投じたのが、アル・ジャジーラやレバノンのLBCであった。カタール政府はアル・ジャジーラをMBC、ART、Orbitなどを間接的にコントロールするサウジとの競争において、自国の政治的自衛の手段とし、戦略的に位置づけてきたとの評価も見られる (Rugh 2004: 215)。アル・ジャジーラが独自の報道手法、独占中継、討論番組などによって視聴者の支持を拡大し、その存在感を中東のみならず世界に示すや (Sakr 2001:124)、サウジアラビアの資本を筆頭にアル・ジャジーラに対抗し得るニュース専門局として設立されたのがアル・アラビアであった。また、近年のドバイ、カ

²⁰ 中東におけるメディア所有の集中化についてはSakr (2001) pp.69-83.を参照。

イロ、アンマンといった中東の各都市における政府主導による相次ぐメディア・フリー・ゾーンの開設やそれにともなうメディア産業の誘致なども各国のメディア戦略とは無縁ではないだろう²¹。

特にイラク戦争以降、衛星放送局の数がますます増加する中で各放送局は市場や視聴者の獲得を意識せざるをえない。アルターマンが「放送局が今後、より市場志向になれば、放送局は視聴者が観たい、読みたいものを提供する方向にますます向かうだろう(Alterman 1999)と指摘するように、メディア産業として自立した報道と広告収入の確保の両立(Mohammed Jasim Al-Ali 2000)という難題も解決していかなければならない。一部の衛星放送局は視聴者を獲得するため、すでに「政治的ポルノ (political pornography)」化しているとのファンディの指摘もみられる²²。また、ハーフェズは中東の衛星放送が「グローバル化したかたちのポピュリズム」(Hafez 2004: 8)を生んでいるとも述べている。

これら一連の指摘は、中東の衛星放送を介して形成されたかのようにみえた「公共圏」のあり方の再考を迫るものになるだろう。マッキガンは「公共圏」における「感情的なコミュニケーション(affective communication)」の重要性を指摘している(McGuigan 1998)。この「感情的なコミュニケーション」という概念は、アラブの公共圏を考える上でも有効である。特に第二次インティファダ以降のパレスチナ問題、イラク戦争といった汎アラブ的関心からなされる中東メディアの報道において、民衆の「感情」は中東世界全体で動員されてきた。

マッキガンは、感情的コミュニケーションに関連して以下のように述べている。「生死が問題の焦点となるようなパブリック・コミュニケーションは、単に合理的な意志のみならず、深い感情とも結びついている。われわれはパブリック・コミュニケーションを考える上でも感情的コミュニケーションを考慮する必要がある」(McGuigan 1998:104)。ハーバーマスによって提起された「公共圏」という概念は、元来、個人の理性を前提として形成される言

²¹ 中東におけるメディア・フリー・ゾーンの詳細については Sakr (2001) pp.109-111を参照。

²² ファンディによる指摘はLynch (2003) を引用。またこれに関連して、ロンドンにおいて汎アラブ紙、アル・ハヤートの記者にインタビューを行ったサラマンドラは、アル・ジャジーラの人気番組「一つ以上の意見 (Ahtar min Raʿy)」のモデレーターであるサーミ・ハダットが、この記者に「何かホットなネタはないか」と頻繁に連絡してくるとの話を紹介している (Salamandra 2003)。

論空間としての性格が強いが、「公共圏」を構成しうるオルタナティブな要素としての「感情」というコミュニケーションは、特にテレビ時代の公共圏のあり方を考える上では重要であろう。

ラントとステナーによる「情緒圏としてのジェリー・スプリングー・ショー」と題した論文では、米国のトークショー番組「ジェリー・スプリングー・ショー」における「感情」によって媒介される公的コミュニケーションをとりあげ、それを「情緒的公共圏 (emotional public sphere)」として概念化している (Lunt & Stenner 2005)。情緒的公共圏、つまり、情緒圏²³という公共圏のオルタナティブな捉え方は、公的コミュニケーションへの市民の参加を促す一方で、民衆の感情をも動員してきた中東の衛星メディアの現状を捉える際に公共圏に比べ、より有効な概念であると、筆者は考える。

(7) 「民主化」の懐疑

中東メディアに対する第三番目の評価として挙げた「懐疑派」の見解を以下、具体的に見ていこう。懐疑派のなかにも意見の幅はあるが、全般的には中東における衛星放送の普及やその社会的影響については部分的に肯定的な評価を行うものの、放送による中東社会の「民主化」という点については懐疑の見解を示している。こうした見解を示す論者のなかにはこれまでに中東メディアに関する研究を数多く発表してきたサクルやアルターマンの他、イギリスの中東地域研究者ハリデイなどがいる (Alterman 1999) (Sakr 2000, 2001) (Hafez 2004) (Halliday 2005)。

サクルは「視覚的な幻想 (optical illusion)」と題した論文のなかで、次のような指摘をしている。衛星放送に影響を受け、地上波放送 (国営) の番組においても目に見える形で変化が生まれているが、そうした変化は政府による検閲を打ち破るほどのものではなく、表面的な変化にとどまっている。むしろ「目に見える変化」の裏側で、エジプトやヨルダンをはじめとする各国政府がメディアへの規制や検閲を強化しており、「変化」は「視覚的な幻想」でもあると論じている (Sakr 2000)。

ロンドンのアラブ・メディア関係者にインタビューを行ったサラマンドラ

²³ 「情緒圏」という言葉は、すでに岩淵功一 (2004)「情報圏から情緒圏としての東アジアへ」伊藤守・西垣通・正村俊之編『グローバル社会における情報論』(早稲田大学出版会)において使用されている。

もサクルと同様にあるいはそれ以上に中東メディアによる「民主化」の可能性に対して懐疑的な見方を提示している(Salamandra 2003)。汎アラブ紙アッシャルク・アル・アウサット編集長による「衛星放送などの新しいメディアは(民衆の不満をそらす安全弁だ)」という言葉を引用し、サウジ、UAE、カタルなどの国や有力者に牛耳られている中東の衛星放送によって特筆すべき変化はもたらされない。むしろ、これらの放送は変化(民主化)よりも過去との連続性を牽引するメディアであるとサラマンドラはみている。

(8) 言論の多様性は「民主化」につながるのか

衛星放送やインターネットといったメディアが将来的に中東の社会に対してどのような影響を及ぼしていくのか。長期的に見た場合、その政治的影響を予測するのは実のところ難しい(Ghareeb 2000: 416)。確かに、衛星放送などの新しいメディアの普及によって、90年代の中東社会の言論環境には、それ以前と比べても違いがみられる。最も顕著な点は、すでに指摘したように言論環境の構造が二重化したことであろう。一方で衛星放送などによって比較的多様な言論が流通し、他方では国家の厳しい統制下におかれた各国の言論状況が存在するという意味における二重構造である。衛星放送の影響を肯定的に捉える論者は、前者が後者に影響を与えるかたちで、各国内の言論状況や政治体制に「民主化」がもたらされる可能性を指摘する。確かにそのような可能性を全く否定するわけではないが、サクルが「衛星放送は地上波テレビの検閲を破壊するような道具ではない。検閲を破壊するという事態が実際に起こるにはまず政治システムにおける変革が必要だ」(Sakr 2000)(Ghareeb 2000)と述べているように、メディアによる影響を即、「民主化」と結びつけるのは性急すぎる見方であろう。

スレブニーが示すように、民主化や社会の変化はメディア中心ではなく、メディアを囲む他の要因との関連で考えるべきであり(Sreberny 2000)、メディアにおける変化と政治における変化は相互行為的に捉えるべきである。また、「民主化」という概念を持ち出すこと自体が、中東社会ではアメリカの傀儡や陰謀であるとの見方が依然として根強いという事情も、メディアと民主化の問題を議論していくうえで忘れてはならない点である(Halliday 2005: 253)。

汎アラブ的には比較的多様な言論が流通し、他方、国内的には言論の規制

があるという二重の状況をどのように理解すればよいのであろうか。先にふれた議論では、こうした二重構造における衛星放送の役割を「安全弁あるいは、硬直した言論環境に対する民衆のフラストレーションを吸収する役割と位置づけていた。少し異なる見方としてハリデイは、こうした状況を言論の多様性は部分的には実現しているが言論の多様性をすなわち「民主化」「市民社会化」とは同一視できない状況であると指摘している（Halliday 2005: 252）。汎アラブ的な情報空間で流通する言論の多様性をハリデイは「自由の妄想」と退け、アラブの衛星放送における多様な声や言論は自由を保証するものではないとする。こうした見方はサクルのいう衛星放送による「視覚上の幻想」といった指摘にもあい通じる。

おわりに

テレビにおいて「ニュース」はあったが、「ジャーナリズム」が存在しなかったといわれる中東世界に、90年代に普及した衛星放送はテレビ・ジャーナリズムの息吹を吹き込んだ。本稿では、中東の衛星放送を四つの段階に区切り発展の経緯を概観した。さらに衛星放送が中東社会で果たしている役割について、英文で出版された先行研究を参照する形で分析してきた。①アル・ジャジーラなどを単に反米、反イスラエルの宣伝メディアとみる見方②中東における衛星放送は民主化や市民社会化を促すとする見方③衛星放送の普及を部分的に評価するものの民主化に対しては懐疑的な見方——といった三つの視点を提供したが、これらは放送の送り手側の意図ではなく、あくまで放送内容やその影響に対する評価を分析している点が重要である。

それというのも、日本における数少ない中東メディアの先行研究の大半が、アル・ジャジーラなど中東の衛星放送を欧米メディアによって独占されてきた国際コミュニケーション状況への打破を指摘するにとどまっており（太田2002）、送り手側の意図を代弁しているに過ぎないと、筆者には思えるからだ。もちろん、こうした南北間の情報格差の是正といったテーマは、その重要性において的を射たものではある。しかし、日本でも中東メディアが提供する情報が日常茶飯事にテレビや新聞で報道される昨今、これら中東メディアに対し、第三者の目で、より踏み込んだ議論や分析が求められている。9.11以降の国際情勢のなかで、日本のメディアは中東発の情報を「アラブの視点」として取り上げてきた。それはアラブの視点には違いないのだが、幾度とな

く指摘しているように、衛星メディアを利用した中東各国の情報戦、衛星放送局間の視聴者獲得競争、メディア所有の集中などを考慮すると、それらを「アラブ」としてひとくくりにするのことに對し、筆者は違和感を抱かざるを得ない。

筆者は、中東の衛星メディアの社会的影響を読み解くうえでのカギとして、以下の二点に注目する。ひとつは中東の衛星メディアが汎アラブ・メディアであること、もうひとつは、「コンテクストのある客観性」がはらむ危うさをめぐる問題である。

中東の衛星メディアはその成り立ちからして、アラブ全域や世界各国のアラブ系の人々を対象とした放送局であり、広範な視聴者をポテンシャルとして持っている。報道の特徴も中東各国の国内ニュースよりも、パレスチナ問題など汎アラブ的な関心に基づいたニュースの割合が必然的に高くなっている。90年代末以降、中東で衛星放送の数が増え、各局が視聴者を獲得すべく競争するような状況になるや、紛争や戦争などを巡る放送がセンセーショナル化、「政治ポルノ化」していく状況がみられる²⁴。こうしたなかで衛星放送を視聴する民衆の感情が動員され、公共圏というよりも、情緒圏の形成ともいふべき現象が起こっている。「中東の衛星メディア＝汎アラブ・メディア」という構図は、アラビア語を媒体として国境を超えた視聴者を持つ中東の衛星メディアが多かれ少なかれ背負う宿命なのだ。

二点目の「コンテクストのある客観性」とは、すでに説明した通りアラブのローカルなコンテクストを考慮したジャーナリズムの客観性を意味する。アル・ジャジーラの幹部、M.J.アル・アリは「CNN、BBCも中東のニュースを報道するが、かれらはかれらの視点から報道している。われわれはアラブの視点で報道することにより、ニュースのもう一方の側面を補填することができる」²⁵と述べている。この報道姿勢こそアラブにおける「コンテクストのある客観性」そのものを示している。アラブのメディアは欧米メディアのバイアスを補うべきだとする「コンテクストのある客観性」は合理的な主張

²⁴ レバノン出身の中東地域研究者で近年、中東メディアに関する研究も活発に行っているテルハミは、中東の衛星メディアはますます市場志向になっているが、それは商業主義的になっているというのではなく、むしろ「最大限の視聴者」を獲得することが衛星放送各局によって重視されている点を指摘している Shibely Telhami (2004), “Keynote Adrees” The Cambridge Arab Media Project: The Media and Political Change in the Arab World, 29-30 September 2004.

²⁵ “A dialogue with Mohammed Jasim Al-Ali” *TBS Journal* No.5 Fall/Winter 2000.

阿部 るり

に聞こえるが、ともすれば報道における偏向にもつながりかねない危うさをはらむ。「コンテクストのある客観性」のわなに陥ることなく、声高に自らの主張を始めた中東メディアとどう向き合うべきか。メディア研究のみならず、政治学、経済学、地域研究など様々な分野の連携が求められている。

参考文献

- Ajami, Fouad (2001) "What the Muslim World is Watching" Nov. 18, 2001 *New York Times*.
- Alterman, Jon B. (1998) *New Media, New Politics? From Satellite Television to the Internet in the Arab World*. Washington D.C.: Washington Institute for Near East Policy.
- Alterman, Jon B. (1999) "Transnational Media and Social Change in the Arab World" *TBS Journal* No.2 <http://www.tbsjournal.com/>
- Alterman, Jon B. (2000) "Counting Nodes and Counting Noses: Understanding New Media in the Middle East" *Middle East Journal* Vol. 54 No.3 : 355-361.
- Alterman, Jon B. (2002). "The Effects of Satellite Television on Arab Domestic Politics" *TBS Journal* No. 9
- Anderson, Jon W. (1999). "Technology, Media, and Next Generation in the Middle East" Paper delivered at the Middle East Institute, Columbia University, Sept. 28, 1999.
- Amin, Hussein (2000) "The Current Situation of Satellite Broadcasting in the Middle East" *TBS Journal* No.5
- Amin, Hussein (2002) "Freedom as a Value in Arab Media: Perceptions and Attitude among Journalist" *Political Communication* Vol.19 : 125-135.
- Auter, Philip, Mohamed M. Arafa, and Khaled Al-Jaber (2004) "Who is Al-Jazeera Audience? Deconstructing the Demographics and Psychographics of an Arab Satellite News Network" *TBS Journal* No.12
- Ayish, Muhammad I. (1997) "Arab Television Goes Commercial: A Case Study of the Middle East Broadcasting Centre" *Gazette* Vol. 59 (6) : 473-494.
- Ayish, Muhammad I. (2001) "American-Style Journalism and Arab World Television: An Exploratory Study of News Selection at Six Arab World Satellite Television Channels." *TBS Journal* No.6
- Ayish, Muhammad I. (2002). "Political Communication on Arab World Television: Evolving Patterns" *Political Communication* Vol.19 : 137-154.

- Boyd, Douglas A. (2001) "Saudi Arabia' s International Media Strategy" in Kai Hafez (ed.) *Mass Media, Politics & Society in the Middle East*.
- Darwish, Adel (2003) "Anti-Americanism in the Arabic Language Media." *Middle East Review of International Affairs Journal* Vol.7 No.4.
- Dourrachad, Mohamed (2002) "An Interview with Mohamed Dourrachad, Deputy Director, Abu Dhabi Television" *TBS Journal* No.8
- Eickelman, Dale E. and Jon W. Anderson (eds.) (1999) *New Media in the Muslim World: the Emerging Public Sphere*. Bloomington: Indiana University Press.
- El-Nawawy & Adel Iskandar (2002) *Al-Jazeera*. Cambridge MA: Westview.
- Fandy, Mamoun (2000). "Information Technology, Trust and Social Change in the Arab World" *Middle East Journal* Vol.54 No.3 : 378-394.
- Ghareeb, Edmund (2000) "New Media and the Information Revolution in the Arab World: an Assessment" *Middle East Journal* Vol. 54 No.3 : 395-418.
- Gher, Leo A. and Hussein Y. Amin (1999). "New and Old Media Access and Ownership in the Arab World" *Gazette* Vol. 61 (1) : 59-88.
- Hafez, Kai (2001) *Mass Media, Politics & Society in the Middle East*. New Jersey: Hampton Press.
- Hafez, Kai (2004) "Arab Satellite Broadcasting: an Alternative to Political Parties?" Cambridge Arab Media Project: the Media and Political Change in the Arab World, 29-30 Sep. 2004.
- Halliday, Fred (2005). *The Middle East in International Relations: Power, Politics and Ideology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Khalil, Joe & Dareen Abu Ghaida (2004) "Appealing to the Hearts and Minds: How Arab Channels Fought for the Gulf War Audience" *TBS Journal* No.12
- Khanfar, Wadah (2004) "The Future of Al Jazeera" *TBS Journal* No.12
- Lumt, Peter and Paul Stenner (2005). "The Jerry Springer Show as an emotional public sphere." *Media, Culture and Society*. Vol.27 (1) : 59-81.
- Lynch, Marc (2003) "Taking Arabs Seriously." *Foreign Affairs*. Vol.82 Issue 5: 81-95.
- 前坂俊之(2004年)『グローバルメディアとしてのアラブ衛星放送の影響ーアル・ジャジーラを中心に』『国際関係・比較文化研究』第2巻第2号(2004年3月)。
- McGuigan, Jim (1998). "What price the public sphere?" Daya Kishan Thussu (ed.) *Electronic Empires: Global Media and Local Resistance*. London: Arnold.

阿部 るり

- 太田昌宏 (2002) 「アル・ジャジーラと中東メディア環境」『放送研究と調査』2002年6月号：68-65.
- Rinawi, Khalil (2003). "Intifada Lives: Arab Satellite TV coverage of the Al-Aqsa Intifada" *Palestine-Israel Journal of Politics, Economics & Culture* Vol.10 Issue 2:57-63.
- Rugh, William A. (1989) *The Arab Press*. Syracuse, NY: Syracuse University Press.
- Rugh, William A. (2004) *The Arab Mass Media*. London: Praeger.
- Saeed, Abdel Moneim (2003) "The Arab Satellites-Some Necessary Observations!" *TBS Journal* No. 11
- Sakr, Naomi (2000) "Optical Illusions: Television and Censorship in the Arab World" *TBS Journal* No.5
- Sakr, Naomi (2001). *Satellite Realms: Transnational Television, Globalization & the Middle East*. London: I.B. Tauris.
- Sakr, Naomi (2001b) "Contested Blueprints for Egypt's Satellite Channels" *Gazette* Vol.63 (2-3) : 149-167.
- Sakr, Naomi (2004) "Al-Jazeera Satellite Channel: Global Newscasting in Arabic." Paterson, C. and Annabelle Sreberny (eds.) *International News in the Twenty-first Century*. Hants, UK: University of Luton Press.
- Sreberny, Annabelle (2000). "Television, gender and democratization in the Middle East" James Curran and Myung-Jin Park (eds.) *De-Westernizing Media Studies*. NY: Routledge.
- Sreberny, Annabelle (2001). "Mediated Culture in the Middle East: Diffusion, Democracy, Difficulties" *Gazette* Vol. 63 (2-3) : 101-119.
- Wilikins, Karin. G. (2004) "Communication and Transition in the Middle East" *Gazette* Vol. 66 (6) : 483-496.
- Wise, Lindsay (2004). "Between Theory and Practice: A Report on the Cambridge Arab Media Project's Conference on 'the Media and Political Change in the Arab World.'" 28-29 September 2004 (*TBS Journal*)